

馬芸を誇る語り

―流布本『曾我物語』注釈ノート―

小井土 守敏

―大妻女子大学文学部

キーワード：曾我物語、流布本、注釈、馬芸

抄録

仮名本『曾我物語』の注釈作業の過程で、問題となる「馬芸」の描写に関する記述について、注釈の試案を提示する。併せて、『曾我物語』が、「弓馬の芸」について詳細な描写を指向していることを指摘する。

一 弓馬の家

武家を表すことばに「弓馬の家」という言い方がある。武士といえ、弓矢と馬の技術なのである。弓射の芸については、『陸奥話記』に称えられる八幡太郎源義家の伝説的な逸話をはじめとして、『保元物語』に源為朝の強弓、『平家物語』に那須与一の「扇の的」など、臨場感たっぷりに描かれる場面がいくつか想起される。馬術のほうはいえ、『平家物語』「逆落とし」で急峻な坂を駆け降りる騎馬隊の描写は、読み聞かせる者を魅了し、宇治川合戦に記される足利又太郎の「馬後」は、人々を感心させる。軍記文学、とりわけその中でも合戦描写において、優れた弓術、馬術の描写は、ひとつの見せ場、聞かせ

どころとなっている。

『曾我物語』、こと仮名本『曾我物語』は、平安末期から鎌倉時代初期にかけての、理想的な武士の価値観、倫理観が、成長していく曾我兄弟に具現化されているような物語となっている。兄弟に、〈理想〉が投影されるということはつまり、その理想とかけ離れた現実があるわけで、享受者は物語の中の理想的武士像に魅了されるのである。ところで『曾我物語』は、軍記文学に分類されながらも、社会体制の变革を伴うような合戦が描かれることはない。そうした作品において、武士が武士らしく描かれる要素として、弓馬の芸の描写がある。

二 『曾我物語』の描写の指向性

『曾我物語』は、兄弟の父の落命の場面につながる「奥野の狩」、兄弟が仇敵工藤祐経を付け狙う「三原野の狩」から「那須野の狩」、そして敵討ちを遂げる「富士野の狩」と、狩場での様子をふんだんに描く。そうした中で、東国の武士たちが、それぞれに弓馬の芸を披露していくのである。その描写は、総体的に詳細であると言える。例えば『平家物語』に比較して、その戦乱が及ぶ影響の大きさも、扱う時間軸も小規模な『曾我物語』は、そうした描写によってその分量を保ち得たと考えることもできよう。しかし、こうした細かい描写の積み重ねが、『曾我物語』の作品世界を築き上げていることもまた事実なのである。

たとえば、巻第一「河津が討たれし事」の弓馬の扱いについての記述を見てみよう(一)。

射翳の前を三段ばかり、左手の方へやり過ぎして、大の尖り矢さし番ひ、よつ引き、しばしかためて、ひやうど放つ。思ひも寄らで通りける、河津が乗つたる鞍の後ろの山形を射削り、行膝の着際を前へつとぞ射通しける。河津もよかりけり。弓取り直し、矢取つて番ひ、馬の鼻を引つ返し、四方を見まはず。「知者は惑はず、仁者は憂えず、勇者は恐れず」と申せども、大事の痛手なれば、心は猛く思へども、性根次第に乱れ、馬より真つ逆さまに落ちにけり。

工藤祐経が遣わした刺客八幡三郎が矢を放つ描写は、詳細であり、かつ合理的である。右方向から進んでくる標的河津三郎を、左側の射程

に入るまでやり過ぎす。狙いを定めて放たれた矢は、当然河津の背後から突き刺さることになる。重傷を負いながらも河津は、矢を番えつつ、自身を射た矢が飛んできた方向すなわち後方に馬の頭を回して狙撃犯をかすかに確認する。

続いて馬を進めてくる伊東祐親には、大見小藤太の矢が放たれる。

：駒を速めて、手綱かひ繰る所に、一の射翳にありける大見小藤太、待ち受けて射たりけれども験なし。左の手の内の指二つ、前の鞍の根に射立てたり。伊東は、さる古兵にてありければ、敵に二つの矢を射させじと、大事の手にもてなし、右手の鐙に下りさがり、馬を小楯に取り、「山賊ありや。先陣は返せ、後陣は進め」と呼ばはりければ、

幸いにも急所を射られることを免れた伊東祐親は、重傷を負ったふりをして馬の右側——やはり狙撃手は祐親の左側から矢を放ったのである——の鐙に下り、馬の体を楯として我が身を守っている。こうした詳細で理にかなった描写が、『曾我物語』に臨場感を与えていることとは否定できまい。ただ、右に引いた箇所は、真名本にもほぼ同文で見える描写であり、仮名本の特徴とは言えない。『曾我物語』の描写の指向性として、すでに真名本にこうした傾向があったということである。

三 馬芸を誇る語り

巻八「富士野の狩場への事」に、次のような下りがある。

ここに、葛西六郎清重、日の暮れ方に至るまで、鹿一頭も止めずして、勢子に漏るる鹿もやと、茂み茂みに目をかけてまはりける。折節、左手の茂みより、鹿一頭出で来たる。願ふ所と見たせば、矢ごろに少し延びたり。鎧に鞭を打ち添へて、下りさまにぞ落としかける。すでに二三段切り違へて、弓打ち上げて、引かんとする所に、思はぬ岩石に馬を乗りかけて、四足一つに立てかねて、わななきてこそ立ちたりけれ。下ろすべきやうもなく、進退ここに窮まれり。上下万民、これを見て、ただ、「あれはあれは」とぞ申しける。今は、馬人諸共に、微塵になるとぞ見えたりける。清重、手綱を静かに取り、とねりなしを結び置き、かがみの鞭を打ち添へて、二つ一つの捨て手綱、むくりんうに落ちかかり、放せば後ろに下り立つたり。馬は、手綱を捨てられて、真砂につれて落ちて行く。かづき弓の本、岩角に彫り立てて、しばし堪へて立ち直る。諸人、目をこそ澄ましけれ。「乗りたり、下りたり、据へたりや、堪へたり」と、しばしは鳴りも静まらず。

葛西六郎清重（正しくは「三郎」）は、獲物の鹿を追って足場の悪い岩場に馬を乗りかけてしまい、身動きがとれなくなってしまう。その窮地からの脱出が、右のように詳細に描かれるのである。そしてその馬術の技量は、人々の賞賛を得たばかりか、この後頼朝から恩賞が下されるという榮譽に浴することにもなる。

この話は真名本にはなく、仮名本において増補されたものである。真名本では、狩場の人々の様子を、全二十組に番えて、それぞれの狩場における晴れ装束と仕留めた獲物の数を列挙していく形式で描くが、その十番目に、葛西清重は豊島小太郎と番えられて記されている

（表記は「笠井」）。葛西清重は、下総国葛西御厨を本拠とした武士で、真名本で番えられている豊島氏と同族。治承四年（一一八〇）石橋山合戦に敗れて安房国に逃れた頼朝を、父豊島清元と共に武蔵国隅田川に迎えて以来、頼朝からの信任の厚い御家人として活躍した人物である。無住の『沙石集』巻七・四「芳心ある人の事」に、「故葛西の老岐の前司と云ひしは、秩父の末にて、弓箭の道許りたりし人なり」、「心も猛く、情けも有りける人なり」と紹介される^(三)。真名本に登場する数多くの東国武士の中から葛西清重が選ばれて、仮名本で馬芸を披露するに至った背景には、こうした他作品における知名度が影響していようか。ともあれ、東国武士の武芸を称える方法として、馬芸、馬の扱いの妙を語るとい手法があるのである。覚一本『平家物語』の、鶴越の逆落としての段で、坂の途中で躊躇する兵共の中に、三浦の一族佐原十郎義連が、「三浦の方で我等は鳥ひとつたてても、朝夕かやうのところをこそはせありけ。三浦の方の馬場や」^(三)と真つ先を駆けたように、馬芸に秀でた東国武士を、より具体的に、詳細に描こうとする姿勢が、仮名本『曾我物語』にはうかがえる。

四 馬芸をめぐる語彙

さて、先の引用中、傍線を付した語彙は、馬を扱う際のいわゆる専門用語であるようだ。日本古典文学大系『曾我物語』^(四)の頭注によると、「とねりなし」は「未詳」、「かがみの鞭」は「鏡鞍などと対になった鞭か、かがみという蔓草でしたた鞭か」、「捨て手綱」は「手綱をはなすことか」とし、いずれも判然としない。なお、「むくりんう」については、この語自体が当該本（底本は十行古活字本である）に存在しない。村上美登志校註『太山寺本曾我物語』^(五)の頭注

には、「とねりなし(舎人無)」は「芝つなぎのこと。舎人は馬の口とりであるが、この口とり無しで馬の動かぬように手綱を結び置くことからこの名がある」とし、「かがみの鞭」は「強馬を打ちとどめる時の鞭の打ち様をいう」、「捨て手綱」は「手綱を放し」と注釈を施す。「むくんりう」については該当語が本文にない。

まず仮名本諸本の異同を確認してみる(六)。

太山寺本 きよしけたつなをしつかにとり、とねりなしをむすひかけ、かゝみのむちをうちそへて、ふたつひとつのすてたつなをすてられて、いさこともにおちてゆく。

彰考館本 清重たづなをしつかにとり、とねりなしをむすひおき、かゝみのむちをしらせ、三のすてたつなはなせは、うしろのおりたちたり、馬はたづなをすてられて、まなこともにおちて行、

万法寺本 きよしけたつなしつかにとり、とねりなしをのりすへ、かゝみのむちをしらせ、ふたつひとつのすてたつなをはなせは、うしろにおりたち、むまはたづなをすてられて、まなこともにおちてゆく。

武田甲本 きよしけたつなしつかにとり、とねりなしをのりすへ、かゝみのむちをしらせ、二つ一つのすてたつな、はなせはうしろにおりたちたり。むまはたづなをすてられて、まなごをとにおちてゆく。

円成寺本 きよしけたつなをしつかにとり、とねりなしをむすひ、かゝみのむちをしらせつゝ、二つ一つのすてたつな、はなせはうしろにおりたちたり。むまはたづなをすてられて、

まなごともにおちてゆく。

南葵文庫本 きよしけ心をしつめ、たづなをしはしゆりしらへ、とねりなしをむすひ、かゝみのしらせ二つ一つのすてたつな、むくんりうにおつかゝり、はなせはうしろにおりたちたり。馬はたづなをすてられて、まさこにおちてゆく、十行古活字本 きよしげ、たづなをしづかに取、とねりなしをむすびおき、かゝみのむちを打そへて、二つ一のすてたづなはちて、うしろにおりたつたり。馬は、たづなをすてられて、まなごと共ににおちて行。

十一行古活字本 きよしげ、たづなをしづかに取、とねりなしをむすびをき、かゝみのむちをうちそへて、二つ一つのすてたづな、むくんりうにおつかゝり、はなせはうしろにおりたつたり。馬は、たづなをすてられて、まさこにつれておちて行。

十二行古活字本 きよしげ、たづなをしづかに取、とねりなしをむすびをき、かゝみのむちをうちそへて、二つ一つのすてたづな、むくんりうにおつかゝる。はなせはうしろにおりたつたり。馬は、たづなをすてられて、まさこにつれておちてゆく。

流布本 きよしげ、たづなをしづかにとり、とねりなしをむすびをき、かゝみのむちをうちそへて、二つ一つのすてたづな、むくんりうにおちかゝり、はなせはうしろにをりたつたり。むまは、たづなをすてられて、まさこにつれておちてゆく。

諸本の異同を取ってみると、「とねりなし」「かゝみの鞭」「捨て

手綱」の三語については、仮名本諸本で古態を有するとされる太山寺本以来用いられている語彙である。「とねりなし」はやはり手綱に関する語彙で、「結び掛け」るもしくは「結び置」くものであるようだ。

「かゞみの鞭」は、大山寺本や古活字本は「打ち添へ」るものであるが、彰考館本などでは「しらす」ものである。「しらす」の語義もまた判然としないが、そうとわからせるといような意と解せよう。とすると「打ち添へ」の「打ち」は接頭語とは考えにくく、むしろ「打つ」ことに意味があり、「かゞみの鞭」は鞭の打ち方と解するべきである。そして「捨て手綱」は、直後に騎手が馬から下り立っていることから、手綱を捨てる、手放す意で相違あるまい。「二つ一つ」はいわゆる一か八かの賭けを意味する語である。「むくんりう／むくしんりう」については未詳のままだが、本文流伝のある段階から付加された語であることが分かる。

『太山寺本曾我物語』の頭注に導かれ、御橋惠言『曾我物語注解』(七)を経て、さらに先行する注釈にさかのぼっていくと、伊勢貞丈の「曾我物語考」及び「曾我物語の内にて」(八)という江戸期の注釈書にたどり着く。「曾我物語考」では、当該箇所について、以下のよう

に指摘している。

此条馬術家の鞭手綱の名と見へたり。むくんりうは馬の乗方の流義の名と見えたり。此物語書し頃、右の流義世に行はれしと見へたり。今は詳ならず。

「とねりなし」等の語彙は馬術家が用いる専門用語であり、「むくん

りう」は、馬術の流儀名だとする。また、「曾我物語の内にて」の中の「巻間曾我物語」(九)に、より詳細な注釈が見える。

○とねりなし。とねりは既の舎人にて馬の口とりなり。口とりなしに馬のはたらかぬ様に結びおくなり。是芝つなぎの事なるべし。岩の上に乗りにかけたれば、おりたんとするに、馬さわげば落馬してけがする故たづなをしづかに取るとねりなしをむすびたるなり。かゞみのむちをうちそへてとねりなしをむすひたるうへに、又かゞみのむちをうつなり。されはうちそへてと云なり。かゞみのむちは、強馬にひかるゝ時、馬をとゝむるむちの打様の名なり。○二つ一つのすてたづな、むくんりうにおちかゝりとは、これはけが、あやまちするかせぬか、二つ一つのわざをしてみるなり。すてたづなは身をすつる意にてはたらくを云。すべて馬上にて馬をあつかふ術を、手綱ともむちとも云。手にとるむち、たづなのみに限らず(ぬ力)詞なり。何のむち、何の手綱と名を付たる術さまゞあり。此条もわざをなす事を手づなと云たるなり。○むくんりうとは、俗に今、自己流、我流などゝ云流に同じ。むくんりうは、無空(ムクウ)流なるべし。無二無三虚空になりてはたらくなるべし。

御橋惠言、村上美登志らは、伊勢貞丈の注釈の系譜に連なることが確認できる。

なお、「かゞみの鞭」について、『大坪本流雲霞集』(二〇)に次のような記述が見いだせる。

一 はね馬には、かゝみの鞭・あひの枕の鞭可_レ打。かゝみのとは左右の口わきなり。あひの枕とはむなかひの引廻、むねかけて打を云也。

やはり、日本古典文学大系頭注のいう「鏡鞍」との関連よりも、轡の一部で馬銜と立聞を繋ぐ「鏡板」とかかわるものと考えられるべきではないか。

五 小括

「むくんりう」については、やはり未詳とせざるを得ない。伊勢貞丈が推測するように、馬術の流儀名の一つなのであろう。ただし、平安末期から鎌倉時代、つまり『曾我物語』の作中時間において、馬術といえば流鏑馬・笠懸・犬追物のいわゆる騎射三物であったはずだが、当時、その技芸に諸流派が存在していたとは考えにくい。我が国の古典馬術では、小笠原流や大坪流が知られるが、そうした流派も室町時代中期以降に興ったものである。そこであらためて興味を引かれるのが、仮名本の中でも古いとされる諸本には、この語が存在していないということである。この「むくんりう」なる語は、馬術や剣術を説明するのに、流派の名称を持ち出すという方法が共有された時代における文飾と考えられよう。そもそも「むくんりう」という流儀名自体が架空のものかもしれぬ。伊勢貞丈は、「此物語書し頃、右の流義世に行はれし」と推測したが、この語は、『曾我物語』が転写されていく過程で、後代の改作者によってもっともらしさを演出するために付加された語であったことが確認できた。すなわち、「むくんりう」の実体を追うことは、今やそれほど重要なことではない。それよりも、流

儀名を冠することの意味やその効果を、改作者が心得ていたという点に注目すべきだろう。

附記

この研究は、二〇一九年度大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号 S1916）の助成を受けたものです。

注

〔一〕仮名本『曾我物語』の本文引用は、正保三年（一六四六）版整版本（いわゆる流布本）により、適宜漢字を当て、句読点を補っている。なお、傍線等は稿者による。

〔二〕引用は、新編日本古典文学全集52『沙石集』（小学館、二〇〇一、二九二）による。

〔三〕引用は、『平家物語覚一本全』（大津雄一・平藤幸編、武蔵野書院、二〇一四、三二五）による。

〔四〕日本古典文学大系88『曾我物語』（岩波書店、一九六六、三二二）。底本は十行古活字本。

〔五〕和泉古典叢書10『太山寺本曾我物語』（村上美登志校註、和泉書院、一九九九、二二七）。

〔六〕対校に使用したテキストは以下の通り。

太山寺本Ⅱ『太山寺本曾我物語』（濱口博章解題、汲古書院、一九八八、四三九）。

彰考館本Ⅱ伝承文学資料集第六輯『彰考館蔵 曾我物語 中』（伝承文学研究会編、三弥井書店、一九七三、八四）。

万法寺本Ⅱ古典文庫161『曾我物語（万法寺本）下』（清水泰

校、古典文庫、一九六〇、三四)。

武田甲本Ⅱ國學院大学蔵本(紙焼き写真)。

円成寺本Ⅱ筑波大学蔵本(紙焼き写真)。

南葵文庫本Ⅱ未刊国文資料『南葵文庫本曾我物語と研究

(下)』(鈴木進編、未刊国文資料刊行会、一九七五、

四六)。

十行古活字本Ⅱ注四参照(凡例に従い原表記を復元する。三
一一)。

十一行古活字本Ⅱ大妻文庫5『曾我物語 下』(大妻女子大学

国文学会編、新典社、二〇一五、三六)。

十二行古活字本Ⅱ大妻女子大学図書館蔵本。

流布本Ⅱ注一参照(ここでは原表記で引用する)。

〔七〕御橋惠言著作集三『曾我物語注解』(群書類従完成会、一九八
六、四五—四五二)。

〔八〕いづれも『安齋叢書』に収められている。「曾我物語考」は卷
二十六、「曾我物語の内にて」は卷四所収。伊勢貞丈没後、その門
人たちによって編まれた叢書で、版行された形跡はなく、門人たち
の間で書写されて伝わった。本稿における引用は、国会図書館蔵本
による。

〔九〕『曾我物語注解』(前掲注七)に「別集安齋叢書四卷間曾我物
語考」とあるのは、国会図書館本によれば論題(作品名)ではなく、
「曾我物語の内にて」の中の章段名である。

〔一〇〕筑波大学附属図書館蔵『大坪本流雲霞集』中冊による。該書
は大坪流の馬術書。上中下三冊。嘉永三年(一八五〇)写。なお、
上・下冊は寛永十年(一六三三)、中冊は寛永七年(一六三〇)の
元奥書を有す。

(受付日:二〇二一年一月二十二日、受理日:二〇二一年四月十三日)

小井土 守敏(こいど もりとし)

現職:大妻女子大学文学部日本文学科教授

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科単位取得退学。
専門は中世軍記文学。

主な著書:『流布本保元物語平治物語』(共著、武蔵野書院)、『大妻文
庫曾我物語』上中下(共著、新典社)、『二松學舎大学附属図書館蔵
良絵本保元物語平治物語』(単著、新典社)、『長門本平家物語』一
四(共著、勉誠出版)他

Depiction of how to ride a horse
—Annotation note to the popular version of "Soga Monogatari"—

Moritoshi KOIDO¹

¹ Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

Key words : Soga Monogatari, Popular edition, Annotations, Equestrian